

## 現地報告・コロナ禍における自然ガイドの状況

宮地 信良

江戸川大学国立公園研究所客員研究員

### 1. はじめに

本年3月ごろから新型コロナウイルスの感染拡大が広がりを見せ、全国学校への休校要請や緊急事態宣言の発出、外出や移動の自粛が求められるようになった。それ以来、全国の国立公園あるいは観光地においても客足が極端に減少する事態となり、私の住む日光でも国立公園来訪者は一時ゼロに近くなったが、以来徐々に回復し、夏の期間はかなりの人出が見られるようになった。

しかし、自然ガイド事業については、現在(7月末)の時点まで客足がバツリ止まったままになっている。例えば日光のS社では、春シーズンの始まる5月～7月のガイド件数は、6月にただ1件のみという惨憺たる状況である。この間、学校の教育旅行のガイドについてはゼロであり、他の事業者もこれに近い状況と思われる。

また、現在ほどの産業についても新型コロナウイルスの感染防止対策の実施が大前提であり、たとえ野外で行うものであっても、話をすることが不可避のガイド業には感染リスクを下げる対策が要求され、今までにはなかったさまざまな困難な条件の下でガイドを行わなければならないとなっている。

本稿ではコロナ禍における日光の自然ガイド事業の状況や、感染拡大防止が求められる中での自然ガイド固有の問題、コロナ禍で明らかになったことについて現場の体験も交えて報告したい。

### 2. 日光における自然ガイドツアーの現状

日光市の自然ガイド事業者S社の5月～7月の2019年と2020年のガイドツアー件数とガイドの出役人数を比較すると次表のとおりになる。

5月～7月の3か月の間に2019年には48件のガイド業務を98人のガイドで行っていたものが、2020年には1件の業務を1人のガイドが行ったのみである。特に件数、人数ともに多い学校団体はほとんどが小学校の修学旅行ガイドであるが、特に5月は修学旅行には

	2019年		2020年	
	ツアー件数	出役人数	ツアー件数	出役人数
設定/貸切ツアー(一般)	17	19	1	1
貸切ツアー(学校団体)	31	79	0	0
合計	48	98	1	1

行ける状況になかった。6月からは幾分自粛は緩んだのだが、授業時間の不足、往復のバスや宿舎での三密が避けられないこと等から、この間修学旅行の催行はほぼゼロであった。

### 3. ガイド時の感染リスクは何か？

ガイド時に起こり得る感染リスクは何であろうか？自然ガイドツアーは野外で行われるものであり、感染リスクは室内に比べればずっと小さいものと思われるが、ガイドはお客に向かってかなり大きな声で解説をするため一定のリスクが生ずる。ガイド時の感染リスクについての文献等は現在のところ見当たらないが、「声を出す」という点でガイドと共通の「歌・合唱」の感染リスクに関する研究結果があるので、これを簡単に考察してみたい。

オランダのアムステルダムでは2020年の3月にバッハの合唱曲「ヨハネ受難曲」の練習で合唱団の100人が感染し、そのうち団員とその家族4人が死亡したという事例が報告されている。<sup>1)</sup>このような事例がある中、全日本合唱連盟では「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」<sup>2)</sup>を2020年6月に発表しているが、その中で音楽関係の「コロナ感染検証研究事例」を資料として載せている。これは室内で歌うことと飛沫の飛散の度合いについての研究であるが、この研究結果の一部を次に掲げる。(下線筆者)

ウ) ドイツ・フライブルク音楽家医学研究所、フライブルク大学病院、フライブルク音楽大学による、音楽の領域におけるコロナウイルス感染のリスク評価<sup>4)</sup>では、以下のように示されています。

—飛沫はそれらの大きさと重さに基づいて迅速に床に沈み、最大 1m の距離に到達する。このことにより、日常生活状況(店舗、事務所等々)における 1.5m の距離の規則は基づいている。(15-16 頁)

—バンベルク交響楽団での三人の歌手の測定で(中略)歌っている者から 2m の距離で気流の速度をセンサーによって測定したところ、何ら空気の動きは測定することができなかった。そこでこの 2m の距離が、不自然な〔無理やり強い〕発音をした場合でも、飛沫感染に関する安全距離とみなすことができる。(16 頁)

—合唱の場合、基本的に歌うという事象の上述の諸特徴が存在している。個々の歌い手によるエアロゾルの形成を前提して考えなければならないので、より多くの人数が集まるほど、閉鎖空間におけるウイルスを含んだエアロゾルはより高い密度で集まることが想定される(Liu et al. 2020)。換気の質がここで同様に重要な役割を演じる(Liu et al. 2020)。また継続時間の問題、つまりどれだけ長く一回の合唱練習が継続するかも、一つの空間において予想されるエアロゾルの粒子濃度に関して役割を演じる。すなわち、より長い時間枠におけるほど、粒子濃度はより短い時間枠におけるよりも高い値に上昇する可能性がある。(18-19 頁)

エ) オーストリア合唱協会がウィーン医科大学の協力のもと実施した合唱団員の呼吸時と歌唱時における呼吸飛散の実験<sup>5)</sup>では、人工的に発生させた霧を歌い手の鼻孔に継続的に送り込み、呼吸の分散状況を可視化させることで、以下のような結果が示されています。(大要・抄訳：全日本合唱連盟)

—呼吸時：安静時の呼吸では歌い手全員の口と鼻の周囲に最大 0.5m の呼吸の拡大が見受けられた。激しい呼吸のとき、人によっては最大 1.5m の呼吸の拡大が見受けられた。

—歌唱時：どんな方法で歌っても、歌い手の頭部の周囲にでた可視化された呼吸は演奏中変わることなく分散していた。この拡大、特に前方に向かうものは、最大で 0.9m にまで及んだ。

—口と鼻を保護するマスクを着用することで大幅に呼吸の拡散を防ぐことができる。

—フェイスシールドでは、口元から下方向へ呼吸が拡散する。

これらから、野外でのガイド時にも適用されると思われる知見として次の3点があげられよう。

- 1) 1～2mのディスタンスを取ることによって、室内でマスク無しでも飛沫の感染を防ぐことができる。
- 2) 呼吸は特に前方に多く広がる。また激しい呼吸時には呼吸がより遠くまで届く。
- 3) マスクを着用することで大幅に呼吸の拡散を防ぐことができる。

#### 4. ガイド時の感染防止対策の検討

ガイド時にはガイドから参加者への飛沫を防ぐことが主な対策となる。ここでは3. で見た検証研究事例の結果を参考に、コロナ禍の中での筆者自身の体験を踏まえて、野外で行われるガイド時の感染防止対策について検討してみたい。

##### 1) 参加者の人数とディスタンス

3. の知見によれば、野外では参加者とガイドの間に 1～2mのディスタンスを取れば、ガイドはマスク無しで話をするのが十分可能と考えられる。参加者の人数が多い場合、ガイドは先頭または参加者の列の中央に立って、参加者に向かってかなり大きな声で話すのが普通であるが、大きな声は小さな声に比べて飛沫量が多くなる。しかし、参加者の人数が少ない場合は小さな声で話すことができるので、ディスタンスが縮められる。ハイキングのコースは細い山道が多いのでディスタンスを小さくできることは大きな意味を持つ。したがって、ガイドレシオ(ガイド一人当たりの最大参加者数)をできるだけ小さくすることがリスクを減らすことにつながる。S社の場合、通常のガイドレシオ(ガイド一人当たりの最大参加者数)は一般団体の場合 10～15名、学校団体の場合 15～20名であるが、コロナ禍の中ではガイドレシオを一般の場合は 8



写真1 通常の解説は参加者に対面して話す場合が多い

☆感染防止対策①：ガイドレシオを小さくする



写真2 少人数だとこの体勢でもガイドの声が聞きとれる



写真3 右端のガイドは横に並んで解説している

☆感染防止対策②：できるだけ参加者と対面しない位置で解説する

名以下としている。

## 2) ガイドの立ち位置と話す方向について

通常のガイド時の解説では写真1のようにガイドは参加者に対面して話をすることが多い。これは参加者がガイドを注目しやすいことや、ガイドの声が聞こえやすいなどの利点があるためである。しかし、呼吸は特に前方に多く広がるので、感染防止のためには避けたい形となる。一方、横方向、あるいは参加者と別の方向に向かって話をすれば、飛沫が参加者に向かわない。参加者数が少なければガイドは様々な立ち位置を取ることができるので、この意味でもガイドレシオを小さくし、対面以外の体勢で解説をする形も考えるべきである。(写真2, 3)

## 3) 体験的なインタープリテーション手法

ガイド時には解説が伴うが、インタープリテーションの手法は解説以外にも多くある。例えば野外での体験を行うことは大変有効な手法である。道の無い森を歩く「森たんけん」、浅い川を歩く「リバーウォーク」、先の見えない谷を歩いてゆく「谷たんけん」、葉の輪郭や葉脈を写し取る「フロッタージュ」、あるいは解説の中で体験をさせる等、さまざまな手法があるが、体験を取り入れることで解説時間を減らすことができ、またガイドとのディスタンスも取りやすいので積極的に取り上げたい。(写真4, 5, 6, 7)



写真4 道なき森を歩く「森たんけん」



写真5 夏に人気のリバーウォーク



写真6 子供は体験や冒険が大好きだ



写真7 解説の中でも体験を取り入れる

☆感染防止対策③：体験を積極的に導入したガイドプログラムとする

#### 4) マスクを着用してガイドを行うことについて

マスクは飛沫の吸入を避ける効果は弱いが呼気の飛散を防ぐ効果は大きいとされているので、参加者に近づく必要がある時には有効と考えられる。しかし常時マスクを着用してガイドを行うことのデメリットもいろいろあることが分かった。ここではマスクを着用してガイドを行うことについて検討してみたい。

##### ■マスクはコミュニケーションを妨げる

ある日、大人対象のガイドを行った。始まる前は、必要な時だけマスクを着けることにしてなるべくマスクを外そうと考えていた。しかし、ガイドは一方的に話をするわけではなく、参加者と双方向の会話をしたり、あるいは突然予期しない興味対象が出現するなど、ガイド中に様々なシーンが次々と展開される。状況に応じて頻繁にマスクの着脱しようとしたが、結局その余裕がなくなり、途中からマスクを終始着用して

行うことになった。ガイドがマスクを着用していたためか、参加者もマスクを着けていた。

マスクを着用していると声が通りにくいという大きな欠点があるが、それだけではなく顔の下半分が完全に隠れることから相手の表情が見て取れなくなるのである。表情が見えないと相手の気持ちを十分に読み取ることができず、ガイドの意思が参加者に伝わりにくくなる。またガイドも参加者の反応を把握しにくくなるので、参加者の知りたがっていることが読み取れずに適切な答えができないなど、いつもと違う困難を感じた。この時の参加者は常連の方で、いつもは終わった後、満足な表情をし合って別れたものだが、この時だけは互いに不完全燃焼で終わってしまったという印象がぬぐえなかった。表情を読み取ることの大切さをひしひしと感じた経験であった。

##### ■マスクは苦しい

マスクは呼吸を妨げるので、長いコースや上りの

コース、時には暑い日差しの中を歩くハイキングでは熱や酸素不足によって、熱中症を初めに悪影響を与えることが考えられる。それだけでなくせつかくの自然の中で良い空気も吸うことができず、ハイキングの楽しさを半減させてしまう。マスクは参加者にもガイ

ドにも大きなデメリットとなる。このため参加者がマスクをつけている場合は、頻繁に休憩をとってマスクを外したり、歩く速さを遅めにしたり、歩く距離を短くするなど、体への配慮が必要で、通常よりも時間のゆとりを持たなければならない。

☆感染防止対策④：参加者がマスクを着けている場合は時間のゆとりを持つ

■マウスシールド

マウスシールドは構造上特に上や横方向に呼気が拡散するが、対面の相手に対する飛散はある程度防げると言われている。実際に試してみても息苦しさを感ぜず、またガイドの口元も含めて顔全体が参加者から見えるのでガイドの表情が伝わるという大きな利点がある。完全な開放空間である野外ではエアロゾル感染は無視できると考えられるので、ある程度のディスタン

スを取りマウスシールドを付けてガイドを行うことが現実的で最適な方法ではないかと思われる。

なお、フェイスシールドは、顔全体が覆われているので熱が内部にたまることや呼吸によってシールドがすぐに曇ってしまうこと、声が外部に聞こえにくいこと、道で転倒した場合にはけがの恐れがあることなど難点が多く、ガイド時の実用には適さない。



写真8 マウスシールドを着けている筆者

☆感染防止対策⑤：特別な場合を除き、ガイドはマスクではなくマウスシールドを着用する

5. 日光の自然ガイド事業者の対応

もし日光の自然ガイドの誰かがコロナに感染したことが発表されれば、ガイド付き教育旅行の多くはキャンセルになるであろう。それだけでなく風評被害を含め観光客のキャンセルが相次ぎ、地域の観光全体への影響が懸念される。各事業者はこのようなプレッシャーの中でガイドを行っている。

前出のガイド会社S社では4月21日から5月いっぱい休業していたが、6月1日から一部のガイド業務を再開するにあたり、感染対策を事前に伝えるためホームページに次のような告知文を出している。

6月1日から貸切ガイドを再開します。

4月21日から5月末日までガイド業務を休止してまいりましたが、感染の勢いが弱まり移動自粛も緩和されてきましたので、6月1日から当面、次のような感染防止の対応をしながら「貸切ガイド」のみ再開いたします。他のお客様と混在する「設定ツアー」および「スライドレクチャー」は引き続き休止となります。なお、状況により再度休止となる場合がありますのでご了承ください。

〔感染防止対応〕

- ・グループガイドの人数は、ガイド一人当たり8名様までといたします。
- ・急坂の多いコースは、呼吸が乱れやすくなる

ためお受けいたしません。

- ・送迎サービスは休止させていただきます。
- ・お客様には当日の集合までにご自身で全員の検温をお願いし、グループ内に平熱を超える方または体調が悪い方がいらっしゃる場合は、必ずキャンセルをお願いいたします。なおこの場合キャンセル料はいただきません。
- ・「自然の中を歩くツアー」という性格上、ガイドはお客様との距離を意識しながら、原則としてマスクを着用せずに行います。ただし料金収受その他お客様と近接する場合には着用いたします。なお、お客様の着用についてはご自身でご判断ください。

担当ガイドは次のような対応を行った上で業務を行います。

- ・事前に検温を行い、万一体調に異常があった場合は担当ガイドを変更いたします。
- ・消毒液を持参し、必要な時にお客様及びガイドの手指の消毒を行います。

新緑や木の花が美しい季節です。日光の自然を存分に楽しみましょう！

また、本年の7月28日にガイド事業者の団体である「日光自然ガイド協議会」が発足した。日光は学校団体の修学旅行や林間学校のガイドを行うことが多いことから、発足したばかりの「日光自然ガイド協議会」は、直ちに「学校団体ガイド時のコロナウイルス対策について」という文書を出した。これは「地域全体としてもこのように取り組んでいます」というアピールであり、個々の事業者だけでなく地域あるいは業界全体が感染防止に取り組んでいるということがお客様の安心につながり、誘客にもつながるとの認識の上に立ったものである。

## 6. コロナ禍の中でのガイドから学んだこと

### 1)「カタマリに話す」から「ひとりひとりに話す」へ

10数名から20名を相手にガイドを行う時は、参加者全体という「カタマリ」に話すことが多くなる。「皆さん……」という話し方である。ところがコロナ禍の中で人数が数名に減れば、ひとりひとりに話すことがやりやすくなる。「Aさん、…」「Bさん、…」と

いう形である。植物に興味のあるAさんには花の話を、動物が好きそうなBさんにはシカの話をして、それをほかの参加者が聞く、というものである。自然ガイドのベースにはインタープリテーションがあるのだが、これもインタープリテーションの手法のひとつと言える。アメリカのインタープリテーションの父と呼ばれているフリーマン・ティルデンは、その著書「Interpreting Our Heritage」で「ビジターの個性に何かを訴えないようなインタープリテーションは無意味である」とさえ述べている。実は人数が多い場合であっても、ひとりひとりに向かって話すのはインタープリテーションの効果が上がることが多い。コロナ禍での少人数ガイドによってこの手法に慣れる機会が与えられたと考えている。

### 2) ガイドにおいて相手の表情を読み取ることの重要性

4. 4)で述べたように、ガイドが今まであまり意識しなかった「相手の表情を読み取りながら話す」すなわち「相手と心のキャッチボールをしながら話す」ということも、コロナ禍の中でマスクを着けた時にそれができなくなった経験から、その重要性を意識することになった。前出の「Interpreting Our Heritage」では「インタープリテーションの主目的は知識の伝達ではなく、刺激を与え、誘発することである」とも言っている。インタープリテーションはコミュニケーションでもあり、コミュニケーションとは単なる情報や知識の伝達ではなく、互いに誘発し合うことによる相互理解なのである。

このことは、実はガイドに限らず広く見られることである。たとえばクラシック音楽コンサートの会場は真っ暗にせず、薄明かりの状態にしている。これは安全のためもあるがそれだけではない。ステージ上の演奏家は、演奏をしながら聴衆の反応を感じ、聴衆の集中度が高いとより高度な演奏になるといったことが往々にして起こる。世界的なオーケストラであるウィーンフィルハーモニー管弦楽団の楽団長は「(日本の)観客の皆さんの多くが作品や演奏についてよく知っていることを、私たち音楽家は肌で感じます。」と述べている。<sup>3)</sup>

### 3) オンラインの限界と体験の重要性

コロナ禍の中で、インターネットを利用したオンライン会議や授業、テレワーク等の重要性や優位性が論じられている。多人数や遠隔地への伝達、あるいは一部の授業など、情報の質によってはオンラインは優れている場合もある。例えばインターネットやCDに

よって、音楽は全世界の人々に届けられている。しかし、オンラインは間接的な伝達ツールであり、相手の細かい感情や気持ちを読み取ることは難しい。マスクを着けてガイドを行った時でさえも、お互いに気持ちや感情が伝わらず不完全燃焼のような感覚が残ったのだが、オンラインではそれ以上にもどかしさが強いと思われる。また互いに気持ちが読み取れない形での議論は、SNSでも見られる通り「歩み寄り」や「相互理解」、「共感」ではなく「対立」を生みやすい。身体感覚や共通体験があって初めて理解や納得が得られるということも多い。ガイドツアーはオンラインが難しいもののひとつと言えるであろう。

#### 4) コロナ禍の中でのガイドから学んだこと

普段は意識の下に埋もれていた様々な事柄がまるで

あぶり出しのように見えてきたことは、コロナ禍の中での体験から得た貴重な教訓であった。上に挙げたことはコロナ禍の中で得られた成果であり、これらを意識してガイドを行うことによって、今後のガイドの質が高まるものと期待される。コロナ収束後も是非これらの経験を生かしてゆきたいと考えている。

#### 参考文献

- 1) 「選択」2020年6月号106ページ 選択出版
- 2) 「合唱活動における新型コロナウイルス感染症拡大防止のガイドライン」4ページ  
2020年6月 一般社団法人全日本合唱連盟
- 3) 「音楽の友」2020年8月号13ページ 音楽の友社